



Scene of GLASS 1.5



ふえええっ!?
どうしたの急に
大きな声出して?

ふえええっ!?
どうしたの急に
大きな声出して?

なぐにを言っているのだ
委員長ツ!!

そんな素晴らしいものを小せへする
なんでもなく、巨乳、平和の
象徴なのだ！知ってるが委員長！
おっぱいの半分は匿してで出来ていんだ
つまり、委員長のおっぱいがこんなにも
大きく美しいという事はそれだけ委員長が
慈愛に満ちていようと証明なのだ！なので
委員長はもっとそのおっぱいに誇りを持って
いいとワタツミ櫻井はぐい思っております！



う……うん
言ってる意味はよく分からなかったけど
櫻井君はおっぱい大きい方が好きなんだね……
よかった…… 大きなおっぱいのせいで
嫌われたらどうしようかと……

もっと揉んでいい？
委員長の柔らかいおっぱい……

んな訳ないじゃん……
俺 委員長のおっぱい見た時
すごく綺麗で感動したんだから……

綺麗……

その言葉に
胸がキュンとなる

好きな人に
容姿を褒められるだけで
なんでこんなにも
嬉しく感じてしまうのだろう

うん……
いいよ揉んで？
好きなだけ触っていいよ？







四つん這いになつて委員長
また後ろから挿れたい……

うん……
ちよつと待つて……

私は床に両膝をつくと
言われた通り腰を
グツと反らせてみた

自然とお尻が突き出され
膣穴はもちろん
お尻の穴すらも
剥き出しになってしまう

「……
これでいい？」

いいよ委員長
すぐくエロイ……

すると櫻井君は
私のお尻の肉を
両手で掴むと
グイツと左右に
割り広げた





あつお尻広げちやダメ！
お尻の穴
丸見えになっちゃう……

委員長の穴
すごく可愛いよ

可愛い穴とか言わないでよ～
そんな所褒められても
反応に困るでしょ

私が気恥ずかしさに照れていると
そんな事はお構いなしに
櫻井君が膣内へと入ってきた

お尻を思い切り
突き出していたせいで
おちんちはすんなりと
最奥へ到達した

そしてそのまま櫻井君は
私の膣内を愉しむように
ゆっくりと腰を動かし始めた



膣内を行き来していた
おちんちんが
次第に太く
張り詰めてきた

……おそっ？

うん……いい？
このまま中でイッても……

櫻井君が切なそうな声で
囁きかけてくる

私の子宮に精子を
送り込みたくて
仕方がないという
そんな声だ

……うんわかってる
一番奥で気持ち良くなってる？

ホントは駄目なんだよ？
今日だけ……
今日だけ特別なんだからね？





今日だけ特別……
そう自分に言い訳をする
彼に強引に押し切られたのだと
自分に嘘をつく

けど心の奥底では
気付いていた

私自身
櫻井君の精液が欲しくて
堪らないという事に……



世界で一番大好きな人の精子を
一番大事なトコロで
受け止めてあげたかった……

彼が私を妊娠
させたがっているのと同じくらい
私も彼の子供を
妊娠したがつていた……





じゃあ
このまま中に出すね……
委員長の奥に思いつ切り……

櫻井君は
私の腰を強く掴むと
さらに激しく
腰を叩き付けてきた

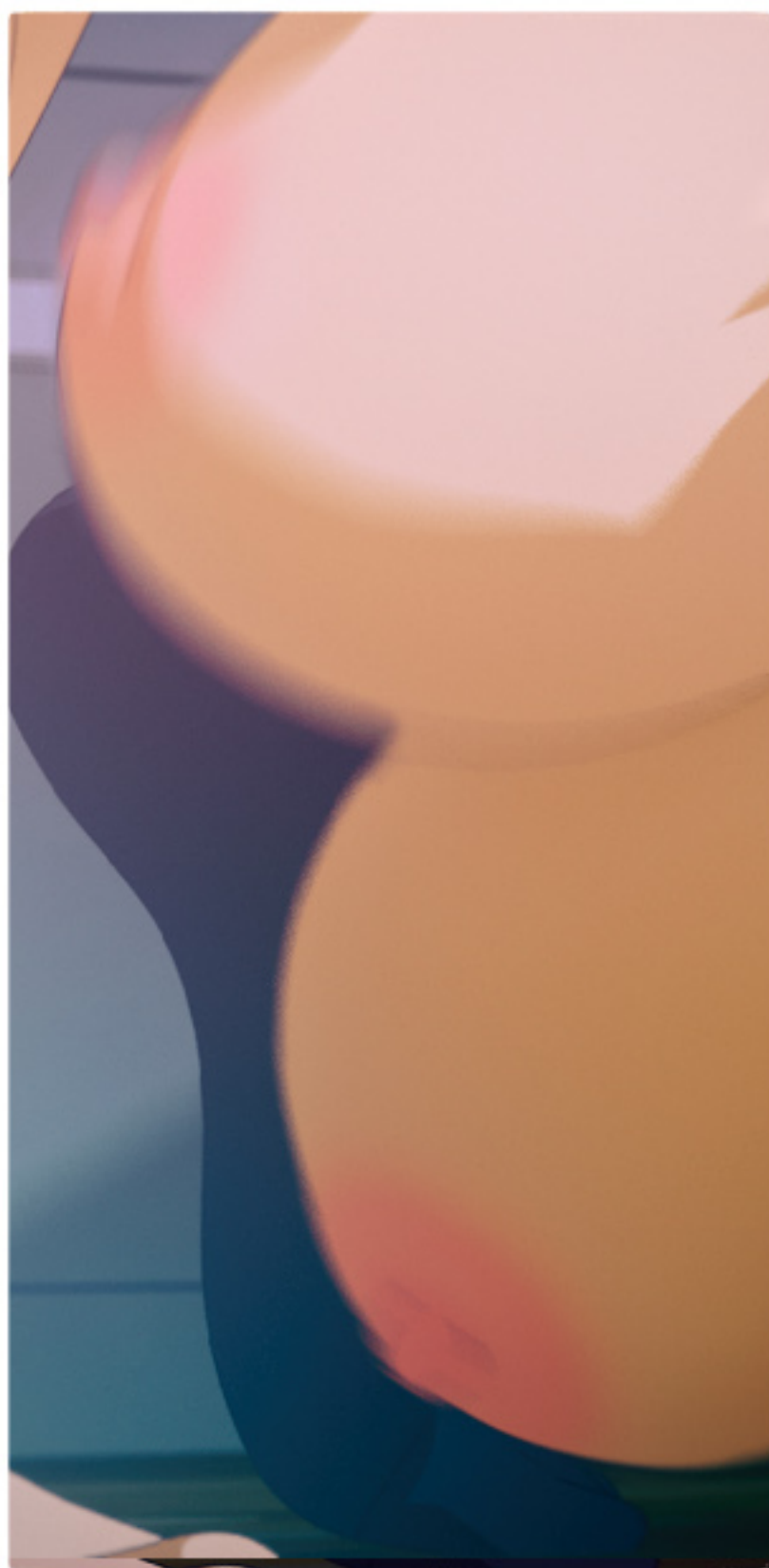
私の子宮に精液を注ぎ込む
ただそれだけの為に



私は身体を完全に固定され
子宮口をぽっかりと広げたまま
その瞬間をただ待つことしか
できなかった

ああ、出る……っ
精子出るっ！

きちやう？ きちやうの？
いいよきて？
精子……っ来てっ♡





櫻井君が気持ちよさそうな声を上げ
おちんちんを一番奥まで押し込んできた

尖端が子宮口にめり込むほど
強く押し当てられると同時に
精液が勢いよく噴き出し始めた

きた……
あつたかいのがお腹の奥に……
赤ちゃん作る体液……
いつぱい広がってく……

どくどくと
精液を注がれていく度に
私の全身を快感が駆け巡った





床ひんやりして
気持ちいい……

背中 大丈夫？ 委員長
……痛くない？

うん大丈夫痛くない
……やっぱり私こうやって
向かい合ってするのがいいな

委員長は
正常位が好きなんだ

正常位が好きっていうか
その……
櫻井君の顔が見えてる方が
安心できるの……

いま私 好きな人に
抱かれてるんだなって
実感できるから……





そう私は今からもう一度
彼に抱かれるのだ
目の前にいる大好きな人に……

これから挿入されるのは
彼のおちんちんで
これから注ぎ込まれるのは
他の誰のものでもない
櫻井君の精子なのだ

私はこの上ない
安心感に包まれたまま
再び彼を受け入れていった

この人だったら
何をされてもいい

たとえその結果妊娠したとしても
後悔はなかった





ああ イキそう……
また中出ししていい？
精液出しちゃっていい？

え？ さっきも出したじゃない
なんで何回も訊くのお……？

委員長の口から聴きたいんだ
エロい口調で
中出しくださいって……
言ってくれる？

ええ？
なんて言えばいいの？

そそるような生々しい表現で
耳元で囁くようにエロくお願い……

ええ？
注文多いなあ……





「あなたの元気に泳ぎ回ってる沢山の精子を……
私の膣の奥にある赤ちゃん育てる大事なお部屋に
びゅーっびゅーって注いでください……っ」

言ってて途中から恥ずかしくなり
最後の方は投げやりになってしまった

しかし
櫻井君にとっては
これで充分だったようだ

心底嬉しそうな
顔を浮かべると
元気一杯に腰を
加速させていった



いくつ……精液でるっ

キス……
キスしながら精子入れて♡

櫻井君が私の唇に唇を重ねてくれると同時に
胎内でも子宮のオクチとおちんちんのオクチが
キスをするかのようにピタリと重なった

その瞬間とてつもない快感が
稲妻のように私の中心を貫いた

視界が真っ白に染まり
身体あらゆる部分が
意思とは無関係に痙攣する





そして気付いた時には
櫻井君の精子が
膣奥に注ぎ込まれていた

これ以上ないくらいの至福の悦びと
気が遠くなる程の圧倒的な絶頂感が
私を包み込む

おちんちん……
中ですごいびゅーびゅー
出してる……
まだこんなに出るんだ……
男の子って不思議……

胎内にじわりと
広がっていく温もり
櫻井君の絶頂の証……

私はそれを
子宮という器で
一滴残らず
受け止めていった



委員長
口で綺麗にしてくれる？

え？
そのべとべとのおお……？

お願い

んーもう……っ
仕方ないなあ

私は洩々了承すると
互いの体液にまみれたおちんちんを
咥内へと迎え入れていった







表面に舌を這わせ
付着した愛液を
丁寧に舐め取っていく

尿道を舌先で
根元からなぞり上げ
染み出た精液の残滓を吸い上げる

さつき飲まされた時に初めて味わった
お世辞にも美味しいとは言えない
あの生臭い精液の味……

なのにどうしてだろう？
自分の体液の中から微かにするその味は
何故だか悪くないような気がした

私はその隠し味を
密かに愉しみながら
纏わりついている
愛液のぬめりを
舌先で丹念に
拭い取っていった



どう？
これで綺麗になったと思うけど……

精液の味がしなくなるまで
しつかりと綺麗にして
仕上げに力一杯吸い上げ
“お掃除”を完了させた

しかし
咥内から解放されたソレを見て
私は仰天してしまった

さっきよりもまた
大きくなってるんですけど……

ごめん委員長……
そのー

はいはい分かったわよ
また精子出したいんでしょ？
じゃあ最後にサービスしてあげる

私は口を目いっぱい広げると
再びおちんちんを奥まで咥え込んだ
舌と唇を密着させて激しく摩擦し
尿管の中のすべてを搾り取る勢いで
強く強く吸い上げていく





射精の予兆が現れるまで
さして時間は掛からなかった

新たに溜め込まれた精液によって
尿道が膨れ上がり
分泌される粘液に精子の味が混じり始める

すごい……
おちんちんの先っぽ
はち切れそうなくらい
パンパンに膨れてる……

これもう射精寸前なんだよね……
やっぱりまた飲まなきゃ……駄目？

恐る恐る訊いてみる

するとそれに対する
櫻井君の返答は
驚くべきものだった



んも……
教室の中 自ら性器を拡げて
男子の射精を待つてゐる……
いつたいどんな状況なのよ……

櫻井君が私に要求したのは
私にエッチなポーズをとらせ
それを見ながら自慰行為をしたいというものだった
そして最後は中出しをしたいのだと

一体どうしたら
そんなエッチな発想ができるのだろう
こういう事に関しては
本当に天才的なんだから……

うわー
すっごいエロいよ委員長
これ以上エロい光景なんて
絶対はないよ……





おちんちんを自らの右手で激しく擦りながら
櫻井君が私の全身に視線を走らせる
舐め回すようにとは

まさにこういう事を言うのだろう
けれどそこに嫌な感じは全くしなかった

男の子の自慰って
そういう風にするんだ……
そんなに激しく
おちんちん扱いて……
痛くないの？

気持ち良いよ……
委員長の膣には全然敵わないけど

きっと私の膣内の感触を思い浮かべているのだろう
櫻井君は見たことのないような真剣な眼差しで
一心不乱に右手を動かし続けていた

勉強にもこれと同じぐらい
取り組んでくれたらいいのに……



射精しそう？
いいよ入れて……

挿入しやすいよう
指で割れ目を拡げてあげると
櫻井君は待ち切れないとばかりに
おちんちんを潜り込ませてきた

あ………出た………

先端が膣内へ呑み込まれると同時に
堰を切ったように射精が始まった

いま精子かけられてるの
分かる……
おちんちん凄い脈打ってる

快楽を伴わない状態での中出しだったので
膣内でのおちんちんの様子が
驚くほどハッキリと感じ取れた





これ今……赤ちゃん作ってるんだよね……
私の卵子に精子かけて……
私の中で射精するの気持ちいい？

うん 気持ち良い……
精液止まらない……

必死に私の奥で射精を
続ける櫻井君の姿から
私を妊娠させたいという
熱い想いがヒシヒシと伝わってきた

いいよ……
最後の一滴まで
膣で出し切つて……

私もそれに応えたい一心で
彼の精子を一滴残らず
呑み込んでいった……



精子全部出た？ 満足？

うん 出た……
委員長の中に全部出たよ……
嬉しかった……ありがとう委員長

私の身体——私の肉体で
好きな人を欲ばせてあげられるなんて
女としてこれ以上の幸せはなかった

……もし私が本当に妊娠したなら
櫻井君はもっと喜んでくれるだろうか？

射精を終えた櫻井君が
幸せそうにお礼を言ってくれた
その顔が見れただけで
膣内で射精させてあげて良かったと思えた

よかった……
ねえ……最後にもう一回キスして？



今日何度目のキスだろうか？

この日最後に交わしたキスは
身も心も蕩けるような
とても甘く優しい優しいキスだった

私はこの唇と子宮から感じる
ぬくもりに包まれながら
永遠に続いてほしいと思える幸福の海へ
溶けるように沈んでいった……





はあ、疲れた

そんじゃ帰るか
家まで送ってくよ

そんないいわよ

送らせてよ
委員長に何かあったら心配じゃん

あ……ありがとう

教室の清掃を終えて廊下に出ると
櫻井君が気を使って言ってくれた







そのさりげない優しさが嬉しかった
学校から一緒に帰るなんて
なんだか恋人同士みたい

そんな事を考えていると
ふと大事な事に気付いてしまった

そういえば私たちは
ちゃんと恋人関係になれたのだろうか？
お互い好きな気持ちを伝え合ったけれど
肝心の事を訊きそびれているような気がした

こうして身体を重ねたことで
既成事実として
もうそういう関係だと言えなくもなかったが
櫻井君にはちゃんと言葉にして欲しい気持ちが
少なからずあった



委員長 俺たちの事だけど……
このままウヤムヤなまま別れるのアレだからさ
キチンとしとこうと思つて

あ……うん

私の考えている事を察してくれたのか
それとも彼自身も気になっていてくれたのか
櫻井君の方から話を切り出してくれた

櫻井君が真剣な顔をして私の前に立つ
私が胸をドキドキさせて次の言葉を待っていると
彼の口からは
いかにも櫻井君らしい告白が飛び出した

結婚を前提に
これから中出しさせてください

な……



何そのプロポーズの言葉ーっ!!

もう

本当に櫻井君はバカなんだから……

正直呆れてものが言えなかったけれど
彼に対する想いに揺るぎはないのだから
恋とは不思議なものだ

却下……
ホント櫻井君ってバカだよなー

いや心の底から偽りなく
飾らない素直な気持ちのつもり
だったんだけど……ダメ?

それに
彼の口から出た結婚の二文字に
心がときめいてしまったのも事実だった





ゴメンわかった
言い直すわ

俺と付き合ってください



私の答えは決まっていた

私は差し出された手を
そっと握り返すところ言った



はい……



——どうして
こうなってしまったのだろうか？

大好きな人の温もりを掌で感じながら
今日何度目かの疑問に思いを馳せる

けれどそれはもう悔やむような
後ろ向きの感情ではなかった

私の心を覆っていた
虚栄心と言う名のちっぽけな鎧は
櫻井君がいとも簡単に剥がしてくれた

ずっと心の奥底に隠してきた本当の自分を
彼は受け止め愛してくれた





櫻井君と一緒になら
変われそうな気がした

彼が私の歩幅に合わせて
歩いてくれる

これからも
ずっと一緒に歩いていきたい……

はじめての恋人が
最後の恋人であって欲しいと
心の底から願った夜だった……

→ Next "New Glass"

